

【特別寄稿】

海洋少年団活動について ～海洋教育を通じ青少年の育成～

青 木 稔
(社)日本海洋少年団連盟専務理事)

目 次

- 1 はじめに
- 2 海洋少年団のあゆみ
- 3 山縣勝見氏と海洋少年団活動
- 4 その後の海洋少年団活動
- 5 新世紀の課題

1 はじめに

本年9月、日本海事センターから、「海に関する国民意識調査」の結果、若年層（10代）の海離れが進んでいるという結果が発表され、まさに驚嘆の思いであった。多くの海事関係者にとっても同様の思いではないだろうか。

こんな時、日本海洋少年団連盟の機関紙に掲載された小学校低学年の感想文（抜粋）

「ぼくは、海洋少年団に入って良かったと思いました。なぜかという、カヌーや手旗信号、水泳などいろんなことが出来るからです。それからふくがかっこよかったです。大人になったらりっぱな人になれると思います。」（中日団：小学3年生）

を読んで、海に親しむ子どもたちにほっとするとともに、この活動を継続、拡大することの重要性を痛切に思った。

日本海洋少年団連盟は昭和26年に結成され、今日まで、五十余年にわたって、海を舞台にした青少年の健全育成と海事思想の普及の歴史を刻んでいる。現在は、全国120余の単位団において約1万名の団員が、「海に親しみ、海に学び、海に鍛える」をモットーに生き生きと活動を展開している。

平成19年7月20日に、海洋基本法が施行され、国民、とりわけ青少年の海に対する関心を高めることが海洋立国としての重要な施策と位置づけられた。子どもたちが物心つく人生のスタート時から、海に親しむ機会を提供している海洋少年団としては、待ち望んでいた朗報であり、反面責任の重さを感じるところでもある。

今回執筆の機会を与えていただいた財団法人山縣記念財団の創始者山縣勝見氏は、日本海洋少年団連盟創設期から顧問として海洋少年団運動の創設に貢献され、昭和33年7月から47年7月まで社団法人日本海洋少年団連盟の第三代会長（その後名誉会長）として、連盟の体制・財政基盤・事業活動全般の強化計画を策定推進し、海洋少年団活動の礎を築かれた方である。

同氏が海洋少年団活動を通じて青少年教育・海事思想の普及にかけられた情熱の一端に触れながら、海洋少年団の歴史、新世紀の海洋少年団活動の問題点と取り組み等について紹介し、海洋基本法施行のこの時期に、海洋国家・日本づくりにいかに貢献できるか検討することとしたい。

山縣氏の没後32年にあたるこの時期に海洋少年団の活動を報告できますことを幸甚に思います。

2 海洋少年団のあゆみ

まず、戦後の新制海洋少年団の生い立ちとあゆみから進める。

（1）少年「海の会」の発足

昭和26年、戦後の混乱もようやく収まりかけてきたことから、初代海上保安庁長官大久保武雄氏、平和の海協会会長福原啓次氏等は、我が国の次代の担い手である少年少女の将来を案じ、その目を広い海に向けさせ、海によって少年たちをしつけることが日本の再建の道であるとの考えから、「少年海の会」を結成することとした。

基本姿勢としては、戦前の海洋少年団の復活ではなく、あくまで民主主義と自由の精神に根ざした、新しい組織とすること、そして混迷する青少年の健全な育成を図るため、少年たちの胸奥に眠っている海への希望と夢を揺りさまして、海に親しみ、海に学ぶ、明朗健全な人づくりの機関を作ろうというものであった。

海上保安庁の全面的な協力により、全国各地に「少年海の会」が次々に結成され、海上保安庁創立3周年の、記念行事の一環として、昭和26年5月13日、東京都内に結成された「少年海の会」会員約350名が皇居前広場に参集して盛大な発会式を行い、式終了後海上保安庁音楽隊を先頭に、350名の少年少女が濃紺の制服に会旗をたてて、皇居前広場から魚市場棧橋まで行進し、待機中の700トン型巡視船「だいおう」に乗船、東京湾を一周し、憧れの海への第一歩を印した。

（2）日本海洋少年団連盟の発足

「少年海の会」の進展に伴い、さらに一歩進め、海洋国民の育成を目的とする海洋少年運動の団体にする気運が、青少年育成関係諸官庁、海事関係会社、団体などに高まり、昭和26年7月21日飛行館において全国代表者会議を開き、ここに、「少年海の会」は「海洋少年団」と改め、戦後初めての全国的少年少女の海洋教育組織として「日本海洋少年団連盟」が発足し、初代会長には、初代海上保安庁長官大久保武雄氏が就任した。

7月22日、皇居前広場で、連盟結成を記念しての第一回全国大会が行われた。

この日は、各団代表34名を加えた約400名の団員が参加し、吉田首相（代理剣木官房副

長官)、水産庁長官、海上保安庁次長など多数の来賓が出席。式終了後、海上保安庁音楽隊を先頭に竹芝棧橋までパレードを行い、灯台補給船「宗谷」に乗船、東京湾一周の航海訓練を行った。

吉田首相の祝辞

今回日本海洋少年団連盟が結成されて、第一回全国大会が開催されましたことは、喜ばしいことと思います。日本の将来は海にあります。みなさんは日本の次代をになう国民として海を愛し、海に学び、海にきたえ、世界の人々と手をにぎって海洋少年団運動をますます大きく発展されてゆかれますように切望します。

海上保安庁では、海洋少年団運動を全国的に浸透発展させるため、各管区本部長あてに文書により指示し、文部省、厚生省、総理府、運輸省、海上保安庁、水産庁は本運動への協力を都道府県に通牒している。

当時の全国の単位団は83団、9千余名の団員構成であった。

山縣氏(新日本汽船社長)は、昭和27年1月から顧問として就任し、海運・造船界からの募金に尽力された。結成当時の財政は、海運・造船界を挙げての協力であった。

(3) 社団法人の認可

連盟の組織も着々と整備されたので、法人組織に着手し、当初財団法人としての準備も進められたが、全国の単位団を会員とする立場から社団法人がより適切であるとの意見により、社団法人に切り替え、昭和28年4月22日文部大臣、運輸大臣から社団法人の設立が認可された。

(4) 歴代会長

歴代会長は、次の通りである。

初代	大久保武雄	(初代海上保安庁長官)	昭和26年～27年
第二代	金森徳次郎	(国立国会図書館長)	昭和27年～29年
会長代行	福原 啓次	(副会長)	昭和29年～33年
第三代	山縣 勝見	(新日本汽船会長)	昭和33年～47年 (以後名誉会長)
第四代	玉井 操	(玉井商船社長)	昭和47年～53年
第五代	永井 典彦	(大阪商船三井船舶社長)	昭和54年～平成6年
第六代	相浦紀一郎	(大阪商船三井船舶相談役)	平成6年～13年
第七代	新谷 功	(川崎汽船会長)	平成13年～20年
第八代	鈴木 邦雄	(商船三井会長)	平成20年～現在

3 山縣勝見氏と海洋少年団活動

(1) 第三代会長に山縣勝見氏就任

連盟は、昭和28年から29年にかけて朝鮮戦争の終結に伴う海運不況のあおりを受け、厳しい財政難におちいるとともに、会長、副会長の辞任等悪条件が重なり、連盟の運営が危

機状態となった。この間福原副会長は「海洋少年団の火種を絶やさないよう、何とか支えてゆかねば」と口癖に申されていた。

昭和32年に至り福原副会長の奔走により、当時新日本汽船社長であった山縣勝見氏に会長就任を懇請しその内諾を得、同年7月の総会で承認を得たが、山縣氏が病氣中で総会に出席出来なかったので、翌昭和33年7月、伊豆大島で開催の第8回全国大会の折りの総会で正式に就任され、5年ぶりに会長を戴くことができた。この間の福原副会長のご心労は察するに余りがあったものといえよう。

山縣会長は就任と同時に大手船会社、主要造船会社の各社長を理事に迎え、その陣容を強化して財政面の立て直しを図られ、その結果、日本船主協会の大口会員をはじめ、興亜火災海上保険の社長でもある山縣会長のご尽力で火災海上保険各社、船舶、造船各社に賛助会員が増え、財政的苦境時代を切り抜けるきっかけとなった。

就任の挨拶

会 長 山 縣 勝 見

「海を制する者は世界を制す」とは古くからいわれている有名な言葉であります、今の日本としては世界を制するというような意味でなく、今後9千万あるいは1億の日本国民が、祖国日本を守って生きて行くためにはどうしても海に生き、海にその発展の活路を見出すほかはないのであります。私はこの間欧米の各国をまわって参りましたが、各国の少年少女諸君がいかにも海に深いあこがれと親しみを持ち、そしてこれら少年少女諸君のあこがれと親しみが海洋少年団の活動を通じて、各国とも立派に国民運動にまで盛り上げられていることを見て非常に感動いたしましたのであります。

私は今回図らずも、日本海洋少年団連盟の会長に推輓を受けたのでありますが、私の念願とするところは、今後この日本海洋少年団をして、諸外国におけるように、海国日本を象徴するにふさわしい立派な国民的団体として発展せしめたい、そしてこの海洋少年団を中心として海洋精神の国民的な盛り上りを期待する運動を展開して行きたいということであります。

山縣会長は、辰馬汽船より新日本汽船の社長となり、昭和39年の海運集約により山下新日本汽船の会長となられたほか、昭和25年より通算6期日本船主協会会長として日本の海運の復興に献身された。また第3次から第5次までの吉田内閣の国務大臣、厚生大臣を歴任されるなど政財界において幅広い活躍をされた。

昭和46年、海外から帰国の直後、脳内出血で倒れ、リハビリテーションに努められたが、ついに車椅子に頼らなければならなくなり、昭和47年8月連盟会長を辞任し、名誉会長とされた。

(2) 主な活動

第三代会長の就任された時期は、連盟の創設期から組織強化の時代であり、組織面、事業面において、海洋少年団活動の原型ができあがった時代である。主な事業と活動について振り返ってみる。

イ 日本海洋少年団強化計画と基金交付

山縣会長、福原副会長は、連盟の根本対策に腐心され、「海洋少年団の育成強化について」（私案）を発表し、運輸省や関係団体に呼びかけ、運輸省海運局の理解を得るところとなり、日本海事財団、日本海運振興会の寄付金または補助金交付団体として本連盟が認められることとなった。運輸省海運局、海上保安庁、日本海運振興会、日本海事財団の指導を得、昭和42年11月「日本海洋少年団強化計画」をとりまとめた。

この計画は、日本海洋少年団の目的、使命、指導方針の明確化するとともに、現状と問題点を分析し、今後の強化計画を詳細に作成したもので、この頃、全国で110数団、25,000名の団員を擁していたが、5年後5万人、10年後には10万人の団員を常時維持することを努力目標としている。

この強化計画に基づき、日本海事財団に3億円の基金交付を申請し、同年12月日本海事財団において決定し、昭和42年から47年の6年間をかけて3億円の基金が交付された。基金交付額が3億円に達しその果実が生じるまでのつなぎ資金として、昭和42年から46年まで、「強化拡充五カ年計画」により日本海運振興会より補助金の交付を受け、昭和47年からは海事思想普及補助の窓口が日本海事財団に一本化された。

ロ 訓練用カッターの建造

昭和37年10月財団法人日本船舶振興会が設立され、その事業の一つに海事思想の普及を目的とする団体を振興するための補助金を交付することが含まれていたため、日本連盟では「カッターの総合的建造計画」を樹立し、昭和37年12月第1回建造資金交付申請を行い、昭和55年までに合計220隻のカッターを建造した。日本船舶振興会からは、昭和39年から3年間連盟が自立するための足がかりとしての助成金を交付して頂いた。

ハ 全国大会（「海の子の祭典」）

全国大会は、日頃全国の各地で訓練や学習を個々に励んできた海洋少年団員が、一堂に会してその成果を発揮し、自分の力を試し、団員相互の親睦と友情を深め、またそれぞれの豊かな地域性に触れる貴重な体験になるもので、創立以来毎年開催され「海の子の祭典」として定着している。

山縣会長は、昭和33年7月伊豆大島で開催された第8回大会に初めて出席された。この大会は、初めて水泳競技が行われ、三原山登山や大営火が組み入れられ印象に残る大会となった。

第12回大会（昭和37年7月、横浜）、第15回大会（昭和40年8月、岡山県津山）には、当時の皇太子同妃両殿下が御臨席を賜り、海洋少年団運動の発展に記念すべき大会となった。

第16回大会（昭和41年8月、小樽）は、初めて北海道に渡り、初めて常陸宮同妃両殿下の御臨席を賜った。両殿下には、平成9年の第43回大会まで毎回御臨席を頂いており、開催地の県・市はじめ一般市民の関心と協力も高まり、海洋少年団活動の理解と発展にはかり知れないものがある。

ニ 国際交流

海外派遣では、特に、昭和41年12月の18日間、世界青少年交流会の事業として「海洋少年団を主体とした東南アジア派遣」に、海洋少年団関係者17名を派遣し、タイ、マレーシア、シンガポール、フィリピンの4カ国において、現地青少年との交歓や友好親善の役割を果たした。

ホ 連盟音楽隊の設立と新団歌の制定

山縣会長は日本連盟直属の音楽隊の必要性を痛感され、昭和39年1月に杉並海洋少年団を中心とした音楽隊が誕生した。音楽隊長は山縣会長の兼任で、隊員50名の堂々たるブラズバンド部が編成されたが、楽器購入費などは山縣会長の寄付によるものであった。この音楽隊は、海の記念日市中パレード、全国大会にも大活躍し、NHKテレビの「それは私です」に出演するなど、隊員の志気も大いに上がった。

その後、音楽隊の主体は、昭和48年には練馬団に、60年には大田区団に移り、平成7年4月からは大田区団と分離独立し、佐藤昌之日本連盟音楽隊長のもとに各種行事にその成果を発揮している。

また、海洋少年団の歌については、当初制定された「少年海の歌」が各団員に親しまれてきたが、年長団員の中から、中、高校生向き団歌を作って欲しいという声が出てきたので、昭和40年6月、ビクター専属の清水みのる先生に作詞を、作曲家渡辺浦人先生に作曲をお願いし、新しい団歌「みどりの広場」を制定した。この団歌はその年の8月津山における全国大会の折、発表会と両先生による団歌指導が行われた。

ヘ 沖縄派遣

昭和42年より、隊員の海洋訓練を主たる目的とし、合わせて沖縄の青少年との交流を図り、沖縄に海洋少年団の結成を促進することを目的として、連盟事業として沖縄派遣を実施した。第1回派遣は、昭和42年3月26日から4月2日まで全国より94名の団員及び指導者が参加した。以後毎年春休み期間を利用して実施し、平成11年まで続けられた。

ト その他、新規事業として、地区大会を推進、全国指導者研修会の再開、表彰基準を作成、互助基金の制定を進めた。

チ 「山縣賞」制定

山縣勝見氏は昭和51年10月29日逝去されたが、昭和53年6月御令息の山縣元彦氏より故人の遺志として「海洋少年団の発展に必要な事業」に使ってほしいと寄付をいただいた。連盟ではこれを「山縣基金」とし、「山縣賞授与内規」をつくりこれが果実をもって毎年全国大会において団活動に功績のあった団に「山縣賞」を授与することとした。

4 その後の海洋少年団活動

(1) 昭和48年から、「海の記念日」(平成8年から「海の日」となる。)にちなみ、子供達に海への憧れとロマンをはぐくみ、創造力を発揮させることを目的として、園児・小学

生を対象に「海」をテーマにした児童画を募集した「我ら海の子展」を毎年夏に開催し、優秀作品を表彰するとともに東京の銀座ギャラリーに展示している。昭和60年からは、最優秀作品1点に運輸大臣賞（平成13年からは「国土交通大臣賞」）が授与されている。

厚生労働省所管の財サークルクラブ協会と共催で実施しており、本年（平成20年）は7千点を超える応募があった。

（2）平成6年、共通の理念と目的を持った世界の海洋少年団組織による国際海洋少年団協会（ISCA：International Sea Cadet Association）の設立に伴い、日本連盟も創立会員として加盟した。ISCA会議は毎年各国持ち回りで開催しているが、平成10年には、アジアで初めて、第4回ISCA日本会議を、横浜・東京で開催した。海洋少年団員の国際交流は、昭和60年から韓国と、平成5年からはカナダと団員の相互派遣を実施しており、平成11年にはISCA加盟国8カ国から40名を我が国に招請している。

（3）平成13年に創立50周年を迎え、これを契機として、団員や指導者等各個人の会員登録制導入をはじめとする制度改革を図るため定款、規約及び規則類の全面改正（平成16年4月1日施行）を行った。

（4）海洋少年団運動のより一層の充実強化を図るため、青少年教育と海洋への造詣が深い高円宮妃殿下に名誉総裁にご就任いただきたく、宮内庁へ願い出ていたところ、平成16年7月14日付をもってご就任のご承諾をいただいた。新世紀の団員達にとって大きな励みとなっている。

5 新世紀の課題

（1）日本海洋少年団は、「海に親しみ、海に学び、海に鍛える」をモットーに、海洋国日本の次代の担い手である全国の少年少女達に、海を活動の拠点として、海に関する幅広い知識を得る機会と海上で各種の体験的活動を行う機会を提供するとともに、団体活動を通じ、社会生活に必要なルールや協調性を学ぶ場を提供し、青少年の健全育成と海事思想の普及に努めている。

また、少年少女達に、国際交流に積極的に参加する機会を提供し、世界各国の海洋少年団との交流により、異文化を体験し、国際感覚を身につけた海洋国民に成長するよう活動している。

（2）一方、近年、少子化等の影響で団員数の減少や、団員数の減少とともに、ボランティアで指導に当たっている団長や指導者の高齢化等が進んでおり、団員の確保と新しい指導者の養成は喫緊の課題である。このため、数年の検討期間をかけ、新世紀に当たる、平成13年に「海洋少年団活動の活性化対策」を取りまとめ、平成16年から会員制度の改革と登録制の採用、指導者の確保等団活動全般の活性化を図る諸施策をスタートさせたところである。

(3) 昨年の海洋基本法の制定を受け、さらに、海洋少年団活動の魅力を高め、活性化を図るため次のようなプログラムの拡充を進めることとしている。

- ①指導者の確保・育成を図るため、指導者研修の充実強化、
- ②海洋少年団活動の魅力向上のために、海洋環境・帆船体験等の時宜を得た取組の導入、
- ③活動の効率性と社会性を強化するための関係団体との連携の強化、
- ④海洋少年団活動のアピール向上のための情報発信力の強化

海洋少年団活動は、現代の青少年にとって、海と言う自然に触れ合い、人間性を向上させるための社会体験の場となり、学校生活や家庭生活ひいては子供たちの将来の成長に大いに役立つものと考えられるので、10万人の団員確保を目指し、草創期に活動を牽引してこられた山縣第三代会長の情熱を大切に、多くの関係者や子供を持つご家庭のご理解もいただきながら、今後とも活動を積極的に推進することとしたい。



昭和44年8月 広島県呉市にて日本海洋少年団連盟会長として団員を
観閲する山縣勝見氏



服装



手旗信号



カッター



ロープワーク



第48回全国大会 音楽隊演奏